

F-3

琉球諸語の語彙に残る強勢言語の痕跡とその示唆

Echoes of a stress language in the Proto-Ryukyuan vocabulary

ユン ヒ ス

尹熙洙（総合研究大学院大学 先端学術院 博士後期課程）

2025年 11月 22日・日本言語学会第171回大会（岡山大学 津島キャンパス）



問題の所在

- 琉球祖語の以下の 5 語の語源が十分に説明されていない

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	> 沖縄語首里方言 'mmaga [0]
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	> 沖縄語首里方言 wikiga [0]
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	> 沖縄語首里方言 wiki: [1]
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	> 沖縄語首里方言 winagu [0]
(5)	*wonari A	「女兄弟」	> 沖縄語首里方言 wunai [1]

- 日本語「ご -^ŋgo」に対応する *-^ŋga が見られるなど、不明な点が多い

本発表で扱うデータ

- 日本語アクセント: Martin (1987)
- 琉球祖語アクセント: 五十嵐 (2016/2019)
 - 厳密には現代琉球諸語の対応によるアクセント類です。
- 琉球祖語分節形: Thorpe (1983), 五十嵐 (2016/2019)
 - 一部の語については、上記の出典とは異なる判断をしています。例えば、「女」に対して Thorpe (1983: 349–350) は、奄美語に見られる *wona^ŋgo に遡る形と沖縄語に見られる *wena^ŋgo に遡る形式のうち、後者を沖縄語の改新とみなしていますが、両方の言語が *wonari 「女兄弟」を持つことや、*onago* のような日本語の存在から、本発表では *wona^ŋgo 系を類推または日本語の影響によるものと考え、琉球祖語 *wena^ŋgo を再建する学説を支持します。
- 沖縄語首里方言: 国立国語研究所 (編) (1963), 多和田 (1985) (歴史的中國資料)
- 宮古語平良方言: Jarosz (2015)

先行研究による語源説: 中本 (1979)

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	> 沖縄語首里方言 'mmaga [0]
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	> 沖縄語首里方言 wikiga [0]
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	> 沖縄語首里方言 winagu [0]

- *-^ŋga を、日本語と一致する *-^ŋgo に「愛称辞の a」が付いたものとしている

問題点

- 指小接尾辞 *-a (発表者の再建では *-ja) がついた語は、首里方言で最後の母音が長くなる
 - 例えば、'atɕo:du 「商人」 に対して 'atɕo:da: 「商人-DIM」
- (1), (2) の最後の母音は長くなっていない

先行研究による語源説: 村山 (1981)

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	> 沖縄語首里方言 winagu [0]
(5)	*wonari A	「女兄弟」	> 沖縄語首里方言 wunai [1]

- (4) と日本語「をんなご *wonna^ŋgo*」の類似を指摘
- *wona^ŋgo の第2音節の非円唇母音 *a の影響で第1音節の *o が *e に同化したと主張

問題点

- 同じ音韻環境にある (5) の *o が *e に変化しなかったことを説明できない

先行研究による語源説: セリック (2022)

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(1)	*umaga C	「孫」	> 奄美語大和浜方言 'maga, 宮古語平良方言 mmaga
(1*)	*putag(w)a?	「双子」	> 奄美語大和浜方言 takkwa, 宮古語平良方言 futaga

- 上代日本語のオ列甲類の母音 o_1 と琉球祖語の例外的な対応を主張
- 上代日本語 o_1 が琉球祖語 *a に対応する例として (1), (1*) などを挙げている

問題点

- (1*) 「双子」とは違って、(1) 「孫」が唇音化子音を持つ方言は見られない
- 現代琉球諸語に反映として唇音化した (K)K^wa(:) と唇音化していない Ka が共存する場合は、後者を前者の借用と考えるのが妥当
 - 例えば、宮古語平良方言 anga ← 沖縄語首里方言 'ang^wa: 「姉」
 - 宮古語には ani 「姉」や mur^ja:ni 「子守り (lit. 守り-姉)」などの語がある

借用仮説

	琉球祖語	意味	想定される形態素の組み合わせ
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	「男性 (male) - 子供 (child)」
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	「男性 (male) - 兄弟 (sibling)」
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	「女性 (female) - 子供 (child)」
(5)	*wonari A	「女兄弟」	「女性 (female) - 兄弟 (sibling)」

- 本発表で扱う語彙は、複雑な母音交替を示している
 - (2), (4) の *^ŋga ≠ *^ŋgo 「子供」
 - (4), (5) の *wena- ≠ *wona- 「女性」
- しかし、そのような母音交替の体系は琉球祖語には見つからない
- かつて存在した改新的な日琉系言語変種からの借用？
 - そもそも (4), (5) が日本語の *wonna* (< *womîna*) に似ているのは不自然

借用元の形と対応規則を考える

	琉球祖語	意味	想定される借用元の形 (←: 借用)
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	← *uma ^ŋ go
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	← *wo(to)ko- ^ŋ go
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	← *wo(to)ko-? (後部要素はまだ不明)
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	← *wo(n)na- ^ŋ go
(5)	*wonari A	「女兄弟」	← *wo(n)na-? (後部要素はまだ不明)

- (4), (5) の前部要素が *wonna* に対応するので、(2), (3) の前部要素は *wotoko* に対応すると仮定する (*wo(to)ko-^ŋgo に関しては *wonoko^ŋgo* を参照)
- 借用元の *o が琉球祖語 *e, *a, *o のいずれにもなりうる
 - *o → *a は語末のみ、*o → *e は非語末のみ、*o → *o はどの位置でも見られる

強勢の導入

	琉球祖語	意味	想定される借用元の形 (←: 借用)
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	← *uma ^ŋ go
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	← *wo(to)ko- ^ŋ go
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	← *wo(to)ko-? (後部要素はまだ不明)
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	← *wo(n)na- ^ŋ go
(5)	*wonari A	「女兄弟」	← *wo(n)na-? (後部要素はまだ不明)

- 他に条件が見つからなかったので、語強勢の存在を仮定
- 語末は *o → *a または *o、非語末は *o → *e または *o
- (2) を見ると、*o → *e が 2件、*o → *a が 1件
 - これによって語末強勢が *o → *a、非語末非強勢が *o → *e であることがわかる

強勢の位置

	琉球祖語	意味	想定される借用元の形 (* $\acute{V}$: 強勢, * $\grave{V}$: 非強勢)
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	← *ùmà ^ŋ g ^ó (第3音節強勢)
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	← *wòk ^ò g ^ó (第3音節強勢)
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	← *wòk ^ò rí (第3音節強勢)
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	← *wòná ^ŋ g ^ò (第2音節強勢)
(5)	*wonari A	「女兄弟」	← *wónà ^ŋ rì (第1音節強勢)

- 強勢は一見 *ad hoc* にも見えるが、実は日本語のアクセントと対応する
 - 高起式 (H から始まる) → 非語末強勢、低起式 (L から始まる) → 語末強勢
 - 日本語 *wonna* 3.2 HHL → (4), (5) は非語末強勢
 - 日本語 *uma^ŋgo* ?3.6 LHH, *wotoko* 3.4 LLL → (1), (2), (3) は語末強勢
 - (4) と (5) の強勢位置の違いについては後述

子音の変則的な対応

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(6)	*ore A?	「それ」	> 沖縄語首里方言 ʔuri [1]
(7)	*e ^m ba- B	「狭い」	> 沖縄語首里方言 ʔiba-sa [0] (ɕiba-sa [0] と二重語)
(8)	*su ^m ba B	「唇」	> 沖縄語首里方言 siba [0] 「舌、(複合語で) 唇」
(11)	*sutomete C	「朝」	> 沖縄語首里方言 sutumiti [0]
(12)	*-su	名詞化辞	> 沖縄語首里方言 -si

- (6), (7) は日本語 *sore*, *se^mba-* との比較から、*s が脱落している (*s → ∅)
- (8) は九州（南部を除く）から山口県にかけて広範に分布する「唇」の意味の *tsuba* 系の形式（日本言語地図 第116図 参照）に似ている (*ts → *s)
- (11) は日本語 *tutomete* に、(12) は九州方言の *-to*（方言文法全国地図 第16図 参照）に似ている

子音の変則的な対応は強勢による母音交替と共起する

	琉球祖語	意味	現代琉球諸語における反映の例
(9)	*ekera- B	「少ない」	> 沖縄語首里方言 'ikira-sa [0]
(10)	*usikeni	「鬱金」	> 沖縄語首里方言 'utçiŋ [0]

- (9) は日本語 *sukuna*- B との比較から、*s が脱落し (*s → ∅)、もし *sokona- を再建する場合、*o → *e の例になる
 - *sukuna*- と同根とされる姓「宿禰」は、稻荷山古墳出土鉄剣の銘文に「足尼」とあり、「足」は中古中国語 *tsjowk* /*tsiok*/ で *sokona- の再建を支持する
- (10) は、呉音の漢語 *utikomu > *utsikon (> 日本語 *u(k)kon*) を再建でき、琉球祖語 *usikeni の母音は *o → *e によって説明される
 - 琉球祖語 *usikeni の再建に関しては尹 (2025) を参照
 - 15世紀沖縄語における *i に隣接しない硬口蓋化子音を説明するために *çi 脱落を想定する (cf. *asita, *pasira > *'açiṭṭa, *paçirⁱa > 'atṭa, ha:ja)

子音の変則的な対応と強勢の配置 (1)

	琉球祖語	意味	想定される借用元の形 (* $\acute{V}$: 強勢, * $\grave{V}$: 非強勢)
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	← *ùmà ^ŋ gó (語末強勢)
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	← *wòkò- ^ŋ gó (語末強勢)
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	← *wòkò-(a)ní (語末強勢)
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	← *wònná- ^ŋ gò (非語末強勢)
(5)	*wonari A	「女兄弟」	← *wónnà-(a)nì (非語末強勢)
(9)	*ekera- B	「少ない」	← *sòkòna- (語末強勢)

- (9) の導入によって * $n \rightarrow *r$ の規則が必要となり、(4), (5) の * $n \rightarrow *n$ と矛盾するように見えるが、* $n \rightarrow *r$ を母音の間に限られたものとし、(4), (5) の該当箇所を * $nn \rightarrow *n$ にすることによって解決できる
- (3), (5) の * ri を *(a) ni から来たものとすることができる (cf. 日本語 *ani*)

子音の変則的な対応と強勢の配置 (2)

	琉球祖語	意味	想定される借用元の形 (*V́: 強勢, *V̇: 非強勢)
(1)	*uma ^ŋ ga C	「孫」	← *ùmà ^ŋ gó (語末強勢)
(2)	*weke ^ŋ ga B	「男」	← *wòkò-ŋgó (語末強勢)
(3)	*wekeri A	「男兄弟」	← *wòkò-(a)ní (語末強勢)
(4)	*wena ^ŋ go B	「女」	← *wònná-ŋgò (非語末強勢)
(5)	*wonari A	「女兄弟」	← *wónnà-(a)nì (非語末強勢)
(9)	*ekera- B	「少ない」	← *sòkòna- (語末強勢)

- 借用元方言には音節末の鼻音が許容されることが確認され、(4) と (5) の強勢位置の違いを説明できるようになる
 - 非語末強勢語は、基本的に後ろから 3 番目の音節に強勢を持つが、次末音節が重音節の場合は次末音節に強勢を持つ (cf. 古典ラテン語; Allen 1973)

借用元方言はどんな言語変種だったのか？(1)

- 日琉祖語の高起式・低起式のアクセントの違いを強勢に変化させている
- 強勢によって母音（特に *o）の音声実現が変わる
 - 非語末非強勢音節では、例えば *ə に弱化され、それが琉球祖語に *e として借用
 - 語末強勢音節では、例えば *ɔ(u) と発音され、それが琉球祖語に *a として借用（強勢音節における下降二重母音化に関してはケベック州フランス語の類例を参照; Dumas 1974）
 - このような強化・弱化は強勢言語の特徴として知られている（Hyman 1975）
- 一部の子音が弱化している
 - *s が ∅ として、*ti, *tu が *si, *su として、母音の間の *n が *r として借用された
 - 例えば *s > *h や、*ti, *tu > *(t)si, *(t)su のように変化していたと考えられる
 - 母音の間の *n は恐らくはじき音化 [r̥]

借用元方言はどんな言語変種だったのか？(2)

- 九州方言と比較される語の存在
 - 恐らく九州を中心に話されていた方言で、琉球祖語が九州で話されていた時代に（Pellard 2015）琉球祖語と接触した
- しかし、このような改新的な特徴を持つ方言は見つからない
 - (8)「唇」は、*s*を持つ形式が九州南部に存在
 - (12) 名詞化辞は、*s*を持つ形式が山口県に存在（cf. Serafim 2003: 471）
 - この方言が新しい方言（現在の九州方言の祖先）に置き換わる中、比較的遅くまで残っていた周辺地域に少しだけ痕跡が残っているのかもしれない
- 本発表では、借用元方言を九州北部を中心にかつて影響力を持っていた方言と考える

- 借用元方言と対応規則の存在は、新しい語源仮説に繋がる
 - 琉球祖語 *ijako 「櫂」 ← *fisako 「柄杓」？
 - 琉球祖語 *m[e]jako 「宮古 (島)」 ← *mesi-fisako 「杓子 (lit. 飯-柄杓)」 ; cf. メシゲ「飯-櫂」(翻訳借用？)
 - 琉球祖語の「加計呂麻」「波照間」のような島の名前; 例えば *pateroma 「波照間 (島)」 ← *fate=no sima 「終わり=GEN 島」
 - 琉球祖語 *ikimosi 「動物」は従来「生きる-虫」とされたが、新しい可能性として *iki-moti 「息-持ち」も可; cf. ラテン語 *animālis* 「生きている (lit. 息-ADJZ)」
 - 沖縄語首里方言の ʔwi:çi 「命令」は琉球祖語 *oese ← *óose 「仰せ」？
 - 沖縄語中国資料 (15世紀～) の「氷」の意の「姑亦立 *gūyìlì*」「谷亦里 *gǔyìlǐ*」は琉球祖語 *koeri ← *kóori 「氷」？
- 九州方言と琉球諸語の関係に関する示唆

本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部です。また、本研究は日本学術振興会（JSPS）科研費 JP24KJ1152 の助成を受けたものです。

参考文献 (1)

- Allen, W. Sidney (1973) *Accent and rhythm. Prosodic features of Latin and Greek: A study in theory and reconstruction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- セリック ケナン (2022) 「上代日本語の甲類の o_1 に対する琉球祖語のもう一つの音対応について」『日本語学会2022年度春季大会予稿集』 115–120.
- Dumas, Denis (1974) “Durée vocalique et diphtongaison en français québécois”. *Cahier de linguistique* 4: 13–55.
- Hyman, Larry M. (1975) *Phonology: Theory and analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Jarosz, Aleksandra (2015) *Nikolay Nevskiy's Miyakoan dictionary: Reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*. Adam Mickiewicz University.

参考文献 (2)

- 五十嵐 陽介 (2016) 「アクセント型の対応に基づいて日琉祖語を再建するための語彙リスト「日琉語類別語彙」」『日本語学会2016年度春季大会予稿集』233-238.
- 五十嵐 陽介 (2019) 「日琉語類別語彙 (2019年5月17日版)」
- 五十嵐 陽介 (2022) 「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ, 2022年 12月 25日, 沖縄県立博物館・美術館.
- 国立国語研究所 (編) (1963) 『沖縄語辞典』 東京: 大蔵省印刷局.
- ウェイン ローレンス (2019) 「竹富島方言アクセント (2)」『琉球の方言』 **43**: 97-129.
- Martin, Samuel E. (1987) *The Japanese language through time*. New Haven/London: Yale University Press.

参考文献 (3)

- 村山 七郎 (1981) 『琉球語の秘密』 東京: 筑摩書房.
- 中本 正智 (1979) 「首里王朝の言語 (2) 人間関係の性・年令・親疎等を基準とする語彙」『琉球の方言』 5: 117–151.
- 中澤 光平・セリック ケナン・麻生 玲子 「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」『日本言語学会第161回大会 予稿集』 78–84.
- Pellard, Thomas (2015) “The linguistic archeology of the Ryukyu Islands. Handbook of the Ryukyuan languages”. Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, and Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, pp. 13–37. Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.

参考文献 (4)

- Leon A. Serafim (2004) 「When and from where did the Japonic language enter the Ryukyus? — A critical comparison of language, archaeology, and history」アレキサンダー ボビン・長田 俊樹 (編) 『日本語系統論の現在』 463–476.
- 多和田 真一郎 (1985) 「朝鮮・中国資料対照琉球語彙」『琉球の方言』 **9**: 60–134.
- Thorpe, Maner Lawton (1983) *Ryūkyūan language history*. University of Southern California.
- 尹 熙洙 (2025) 「宮古語諸方言の比較による母音祖体系の再建と 15 世紀沖縄語」『方言の研究』 **11**: 81–106.